有り得ない世界にわたし

kiiro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
有り得ない世界にわたし

【Ｎコード】
Ｎ９２０３Ｚ

【作者名】
ｋｉｉｒｏ

【あらすじ】
知らないけど、マフィアの娘に。
とりあえず、一生懸命に生きる事を目標に毎日を過ごす。
なぜ、どうして異世界に来たのかはわからないけど
、幸せに成るために頑張ってるうちに色々勘違いされて、話が大きくなってきちゃった話。

お嬢様について　その１（前書き）

色々不慣れで間違いもいっぱいでしょうが、許してください。

沢山、言いたい事いっぱいでも、優しく見守ってください。

完走出来るようにがんばります。

お嬢様について　その1

とりあえず、今日も地道に地味にいきる事を目標に頑張ろう！
自室のベッドの上で決意表明をしていた。
この世界に生きる事になってからの習慣。

「お嬢様、朝食の準備が整いました」
柊。
彼は、わたしの従者。
わたしの面倒を幼き頃から見てもらっています。
きっと、嫌がられてはいないと思いたい。

「ありがとう。」
高そうなカップにお湯を注ぎ込みながら、彼はニコリと口元を上げた。

「本日は、ファミリーの皆様方ご集合の御命令が、お嬢様もと旦那様がおっしゃっておりました。」

「そう、わかりました。参ります。」

わたしはそう答えながら、面の厚くなった顔を笑顔に変えた。
何が起きても驚くなんて顔は、表に出さないでいられる自信がある。
だって、それくらいしか私には武器がない。

こんな変な世界に対応出来るわけない！？

ない！？

だって、だって、だって、

マフィアのドンの娘って何！！

お嬢様について　その１（後書き）

完走出来るようにがんばります。
よろしくお願いします！

お嬢様について　その2

私が初めて従者としてお勤めする事になったのは、１２歳。
父に連れられ、バレルファミリーの本部にやってきた。今から１５年前だ。

バレル島を本部としている為、そう言われているバレルファミリーは、この世界で5本の指に入る大きなマフィアだ。

バレルファミリーのドンには、3人の娘がいる。

長女、イノリさま。

二女、ミノアさま。

三女、ヒノエさま。

3人のうち、末のヒノエさまは、奥様が違う方からお生まれになっている。

わたしは、三女ヒノエさまの従者として推挙された。お嬢様、当時2歳。

ヒノエさまの従者になるに辺り、マフィアとして力のあるもので、年も近きものではなくてはならないと強く、ドンとドンナに言われた。
父は、ドンの幹部を務めていた。

２歳と１２歳。
近くはないと思うが、私が従者になった。

ドンの奥様は、金髪波うつ背の高い美人だ。

ヒノエさまは、黒髪で黒眼。腰程にある髪は、艶やかであるが、真っすぐ伸びている。
背も１９０センチほどある私から見るとかなり低い。
先日、１４５センチほどであると、専属の医師が言っていた。
当然、３人のうちでも一番低い。

イノリさまは、１７１センチ。
ミノアさまは、１７７センチ。

可愛らしいお顔に小さい背。
御本人は気にしているらしく、お食事は何時も魚をメインにし、ミルクをお飲みになる。

マフィアの娘だが、好戦的で派手な上の２人に対し、温和しめな方だ。慈悲深い方であり、血生臭い事を嫌うため、マフィアの役目は少々酷ではないかと思った。

１４年前

「ひーらぎ、おじちゃん倒れてる。たしゅけて。」

侵入した賊をみてそうお嬢様はおっしゃって、慌てて私の方に向かって走って来た。

そいつは、今お嬢様の運転手兼護衛をしている渡だ。

１１年前

「柊、倒れてた。どうしよう。」

雨の日、雨具を羽織っていたお嬢様は、一生懸命走って来て私を呼んだ。

それらは、現在お嬢様のペット兼友人となっている、フォボスにディモスだ。
因みに鷹である。

お嬢様は、マフィアのボスの娘である。

お嬢様について　その3

あの日は、月の光の入らない日だった。

ワシが、このバレルファミリーの仲間入りしてから、かれこれ14年経過していた。

食うものに困り、訳の分からない奴等にファミリーに侵入して来いと言われたことがきっかけだった。

とりあえず、食べ物にはありつけたが、囮だったワシは、敷地内で力尽きた。

死ぬのもイイと思った。そうすれば、すべてが終わると思ったからだ。

妻や息子は、事故でなくし目標を失っていたワシには丁度よかったのだ。

目を覚ますと、小さな手が見えた。

「だいじょーぶ、おじちゃん」

黒髪、黒眼の幼子だ。

「ああ」

「よかった」

「だれだ、おまえっ…痛っ～」

「お嬢様です。そのような口は慎んで頂けますか」

幼子の後ろに控えていた、黒服の子供？はそう言ってワシを殴ったのだ。

その時、はじめて綺麗なベッドに寝かされていることを悟った。

「おじちゃん、行くとこないの？」

「行くとこ？？」

「うん、ひいらぎがいった。」

「えっ、ああ、、気にするな、お嬢様」

「えっとね、じゃあね、ここで働けば」

「は？」「ええ？？」

「そうだ、今日からわたりね、名前はわたり。」

「渡、おはよう」

あの頃より少し成長したヒノエお嬢様が車の前に顔出した。

「おはようございます。今日はどちらへ」

扉を開けて車の中に乗車させる。

「渡。何でも皆集合なんだって…、わたし行ってどうするんだろうねぇ…はぁあ」

「そうでございますね…」

「渡！！」

「はい、はい、そうだなぁ…、ワシにもわからん。まあ、行ってから考えたらどうじゃ」

「うぅぅ…、そうするしかないんだね」

「ハハハハハハ」

雇われることになってから、力のあるマフィアの末娘だと知った。護衛をするに辺り、かなり身体を鍛えなおされた事が一番しんどか

った。
ヒノエお嬢さんはワシのことを気に行ったのかよく様子を見に来ていた建前気は抜けんかった。
面白いお嬢さんで、ワシに名前を付け、新しい家族の一員とした。
名づけるとは、マフィアの世界では、そういうことを意味するらしい。
一度無くしたものだった命、それもよかろうと感じた。
あれから１４年、身長はあまり伸びんかったお嬢様は、ワシより２０センチも低く、未だ子供のような容貌だ。よい家柄の娘としても少し変わっているが、よき娘に育った。
ワシも年をとったということか…。

「渡は、イケメンだよね、だから！！」

ヒノエお嬢さんになぜワシを助けたか聞いた時、そういった。
キラキラした顔だったので聞けんかったが、一体あれはなんだったのか未だわからん。
ただ何か、大きな期待が含まれていたのは事実のようだったが…。
期待してくれているのだから、答えねばならんがと結論付けた。

（イケメンなら、いづれダンディーになるかもしれないし、見てみたいじゃん♪）
（彫の深いイタリア系ダンディズム♪）
「イイ感じだよねぇ、わたし凄い」

「お嬢さん？」

「ううん、一人言」

ヒノエお嬢さんは、マフィアの末娘だ。

お嬢様について　その４

私は、なぜこんなところでお嬢様をしているか？
まだ、小さいころは今より真剣に考えていた。

（赤子って話せないのが、玉に傷だわ）
うつ伏せに、寝っ転がっていた私は、だだっ広い部屋にぽつんとしていた。

（この状況、どう見ても何か事情がある赤子なんだわ）
立ち上がろうと試みるも失敗。

（1日に何度か訪れるメイドも色々だし、第一なんで私こんな赤子になってんの）

２０００年代の日本のＯＬとして日々、仕事という荒波と格闘中だった、わたし。
ワーキングプアもいいとこだった。
とりあえず、正社員にならなくてはと必死だ。
仕事中、課の上司な何か言われてる内にフェードアウト。
気付いたら、ここにいて、赤子だった。

「失礼いたします」

「あぁぅ〜」（なに〜）

「奥様、こちらでございます」

「あぁ〜？」（えっ）

「この赤子が、ドンが外で作ったという娘ですか」

「はい。直属の部下よりそう聞いております。東の国へ滞在中、遊郭という場所の遊び女が集う宿でまだお付きとして仕事をしていた女との間に出来たと聞いています。この赤子を産んですぐ亡くなったそうです。不思議な女性だったとおっしゃっておりました」

（えーーっ修羅場…）

「…そう、あの人男の子に間違いはないならよい。この赤子も育てよとのご命令です」

「ですが、奥様」

「そのようなことは、どうでもいいのです。わたくしの勤めを果たせば自由になれるはず、わたくしの勤めは、子を産みある程度まで育てる。それだけです。」

赤子ながらに、壮絶な家庭環境であることは理解した。
（まさか、マフィアだとは、思わなかったけど…）

その後、ドンとやらに会ったのは、奥様がやってきてから8日後のことだった。

「ヒノエ」

昼寝中起こされたわたしは不機嫌だった。

「うきゃーう」（なんだよ、眠いんだ）

「以前より重くなったか？」

「なー」（だれ、あんた）

「お前は、母である藤によく似ている。不思議と落ち着く女だったが、変な力のせいであまり身体は丈夫ではなかったな。お前にも受け継がれているのか…」

「はぁううぁぁ」（何、ソレ！）

「大きくなれ」

そう言って静かにこの部屋を後にした。

（どうでもいいけど、なんか彫深くてちょっと凄みのあるイケメンだった…、ここって全員イケメン仕様なのかな？）

その考えは、２日後部下とやらがやってきた時に間違っていたことを悟ることになる。

わたしは、イケてる感じのドンの娘だった。

お嬢様について　その5

１５年前

「カイル、お前は今日から柊と名乗れ」

「はい」

私は、父にドンの別宅へ向かう途中そのように指示された。

父は、幹部の中でも7武神の中の一人だ。

バレルファミリーは、ドンを中心に7武神がいた。

金の管理をする部署
島の警備を担当する部署
船の警備を担当する部署
武器を管理する部署
暗殺を担当する部署
外交を担当する部署
内部の監査を担当する部署

以上に分かれているすべてのトップのことを指す。

内部の監査を担当する部署のトップに立っていたのが父だ。
バーン・アウディト。
不器用な父だったが、仕事での信は厚い人だ。

「お前は、ドンの末娘ヒノエ様の従者だ。わたしの息子では無くなる。よいな、励め」

「はい」

「失礼いたします」

そう言って入ってきたおっさんは馬鹿でっかくて、ついでに恐ろしかった。
顔が。

「ヒノエお嬢様だ。柊」

「……、柊です。よろしくお願いいたします」

「あぅー」（よろしくー）

次に入ってきた少年は、美形だった。
青い眼に茶髪。
身長およそ１６５センチ
隣の厳ついおっさんは、２メートルを超えていそうな身長だ。
顔が怖いを足して、２重苦。

（恐ろしい。この世界はイケメン仕様じゃなかったのか）

案内された別宅の最奥、そこがお嬢様の聖域でした。
扉を開けて眼に入ったのは、小さな赤子だった。
標準よりも小さい赤子で驚いたことを覚えている。
抱いた時、大きく零れそうな黒眼でじぃーとこちらを見つめていた。
泣く訳でもなく、ただ見つめられていた。
最初、赤子と抵抗があったが、すぐに吹き飛ばされ可愛さに負けたのだ。

（近くでみると、ますます美形だ♪）

「お嬢様、あーん」
「お嬢様、オムツ変えましょうね～」
「お嬢様、ねんねの時間です」
「お嬢様、…」

「はぁ…」（甘かった）

その後、どうでもいい羞恥心と戦うことになろうとは、あの時ちっとも考えていなかった。
最悪だ。

私は、お嬢様が可愛くて仕方なかった。

私は、ドンの娘として羞恥心と戦った。

お嬢様について　その6

１１年前

フォボスとディモスに会ったのは、雨の日の庭だった。

日本だったら、わたしは小学生入学を迎えていた頃だ。

「ぴちぴち、ちゃぷちゃぷ　らんらんらん♪」

「お嬢、屋敷に戻りましょう」

「やだ」

「お嬢～、柊に怒られるの、ワシなんですよ～」

「やだ」

渡は、護衛の為どこまでもついて来る。

丁度、それにイラついていた頃の話だ。

まあ、この屋敷には柊、渡、私の３人のみしか存在しない。

柊は、メイドを追い出してしまったから、家のことで忙しい。

まるで、執事のごとく働いているし、もっぱら屋敷内は渡と行動した。

護衛なんて意味なしと思っていた。

「あっ、かたつもり！」

「いいえ、お嬢、かたつむりです」

「む～、間違えた」

「ハハハ」

「笑った、渡！！」

「ハイハイ、帰りますよ～」

「わた…っ」

「覚悟！！！」

わたしは、その後泥濘にはまって転んでしまって見えなかった。

「お嬢！！」

見えたのは、赤い血が水溜まりに流れて雨に色をつけていたこと位だ。

それから、大きな音が聞こえたことだ。

耳がぐわんぐわんしていた。

どこかで鳥の鳴き声のようなものが響いた。

「お嬢、振り向くな！！！」

「う、うん」

「大丈夫か」

「ごめんちゃい…」

「いいや、お嬢は悪く…」

「ううん、鳥さん死んじゃった」

「いや、お嬢、死んだのは鳥じゃないくて刺客なんだが…」

渡に抱きあげられながら、私は1メートル程先の木の下を指差した。

「鷹…か？」

「たか？」

「ああ、子供がいるみたいだな」

「……（どうしよう、やってしまった。私のせいだ）…」

子供がいたのに、親鳥を殺めてしまった。

「おい、お嬢動くな」

わたしは、渡から無理やり離れて、柊のもとへ駈け出していた。

あれから、鷹の飼い方とかで忙しくてすっかり忘れていたが、確かに狙われてたのは私だった。
神経図太く出来てんなーと今思うと感じる。
あれは、あの後どうなったんだろう…。

あんまり、考えるの止そう。
私の心の平和のためだ。

「痛い、フォボス、あげるから、突かないでっ」
赤眼のフォボスは、私から餌をほしがった。
ディモスは我関せずといった風貌だ。
鷹にも人格？いや鷹格が存在するらしい。
金眼のディモスは、クールだ。

「お嬢さん、そろそろ屋敷に着きますよ」

「うん」

「二人は、ワシが預かっておくとするか」

「うん、お願い。適当に遊ばせといて」

「柊は、先に行っているはずです。表からお入り下さい」
そう言って、渡は車の扉を開けた。
腕を差し出す。

「ええ、わかりました」
着物の裾を寄せて、私は立ち上がった。

「いつ来ても、馬鹿でかい城のようだわ」

私は、車から降りマフィアの娘として屋敷に踏み出す。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9203z/

有り得ない世界にわたし

2011年12月30日00時52分発行